



オシドリに会いに行ってきました！

昨年6月号の『ボラみみ』で、どんぐり拾いのボランティアを紹介しました。すぐにでも、そのどんぐりをエサとして、オシドリを保護している「おしどりの里」に行ってみたかったのですが、車でしか行けないと思い、諦めていました。ところが、よく調べてみると、JR飯田線の本長篠駅前から豊鉄バスに乗って行けることが分かりました。その上、名古屋から本長篠のお得な往復切符がありました。

紅葉には少し早い10月末に出かけました。バスの乗客は私一人だけでした。本長篠から鳳来寺の前を通過して田峯のバス停まで約30分、そこからおしどりの里までは歩いて数分です。山深い、とても静かなところです。神経質なオシドリが、人の気配や物音で驚かないように川の淵まで青いシートで囲み、人の姿が直接見えないように工夫されています。四角い小さな窓が作っており、そこから覗いたり、写真を撮ったりします。そして、倉庫の中には、たくさんのどんぐりが入ったコンテナがいくつも置いてありました。

「おしどり愛護会」の伊藤さんにもお会いし、おしどりの里について過去にテレビで放送された番組を見せていただいたり、たくさんの美しい写真を見せていただきました。以前は伊藤さんのお父さんが保護活動をされていたそうです。最初は10羽足らずだったオシドリは、今では数百羽になっているそうです。現在、家族の方は関東地方にお住まいだそうです。オシドリが来る時期だけは伊藤さんは田峯に滞在し、おしどりの里を守っています。世話をする中で、いろいろな

苦労があるようです。数年前には、豪雨のために甚大な被害を受けたそうですが、ボランティアの皆さんの努力で元通りに改修されました。また、山深い静かな場所のため、オシドリ以外にも珍しい鳥も生息しています。それを聞きつけて、爆音を立てて車やバイクの集団が現れることがあり、警戒心の強いオシドリに影響があるのではないかと心配しているそうです。

オシドリはいつもいるわけではありません。私が行った時も、朝早くには何羽か来ていたということですが、なかなか現れませんでした。バスの本数も少ないので、そろそろ帰ろうかという時になって、伊藤さんから「飛んできたよ!」と声をかけられ、見ることができました。帰りのバスも乗客は私一人だけ。奥三河の美しい自然の中で、いつまでもオシドリが安心して生息できるようにと願いながら帰途につきました。

(編集チーム・藤谷マルミ)



ボランティアの力で集まったたくさんのどんぐり

おしどりの里

北設楽郡設楽町田峯竹桑田3-6
TEL : 0536-62-1000
(設楽町観光協会)



みんなで支え合い共に成長する喜びを感じられるボランティア



まっつんより

「ボランティアをする」って、立派なことやすごいことと思われがちですが、全くそんなことはありません。あなたの趣味がどこかで人の役に立つかもしれませんよ!

ある日のまっつんの1日

- 18:00 : リハビリの仕事終了
- 18:30 : 渋滞を乗り越えライオン室へ到着
- 21:15 : 受け手さんとの振り返り
- 21:30 : 事務処理
- 22:00 : ライオン室から帰宅

子どもたちを対象にリハビリのボランティアを行う活動をしていた時、一緒に活動していたメンバーに「チャイルドラインあいち」のことを教えてもらったのが始まりでした。当時「チャイルドラインあいち」には、ピアカウンセリングのような形で若者が電話を受ける「Aライン」があり、その電話の受け手ボランティア養成講座を受け、活動を始めました。Aラインでは、16歳から大学生までの20名程度が活動していたそうです。常設の「チャイルドライン」とは違い、単発で連続72時間開設するというもので、みんなで泊まり込み、交代で睡眠や休憩をとりながら、電話を受けたそうです。「初めて電話を受けた時は、もう心臓バクバク。でも、みんなで過ごすのはキャンプのようで楽しかったですね」と当時を振り返ります。

学生から社会人になり、活動に関わる時間は減りましたが、ずっと活動を続け今年で14年目。学生の頃はいくつかの団体に入っていたそうですが、今も続けているのは「チャイルドラインあいち」だけだそ

うです。代表の高橋弘恵さんは「まっつんなどAラインのメンバーは、学生から社会人に成長していく姿を見守ってきているので、親子のような関係ですね」と言い、まっつんも「母親がたくさんいる感じ」だと言います。「ここでは、年齢など関係なく和気あいあいとしていますね。みんなちゃんと話を聞いてくれるので、自分の意見も言いやすい。そういう雰囲気がとても安心できる」とのこと。そういう居心地の良さがあるからこそ、活動を長く続けられるのかもかもしれません。

チャイルドラインあいちでは、子どもからの電話を受ける「受け手」以外にも多くのボランティアが活躍しています。まっつんは今、ステップアップ研修()の企画担当であり、「支え手」でもあります。電話の受け手を見守り、サポートする「支え手」は、「今日もおつかれさまでした」と受け手を労うのはもちろん、時には受け手に学びを促さなければなりません。「どういふうに言えば、相手に伝わるかといつも考えていますが、それでもうまく伝わらない時もある。誤解なく、きちんと相手に伝えるのは難しいなあと感じます」とのこと。そんな時は支え手同士で聞き合い、フォローしあっているそうです。「受け手も支え手も、困ったり、いやだったりの気持ちをそのままにしておかないように、日常に持ち帰らないようにしています」と代表の高橋さん。活動のやりがいはもちろん、支え合う仕組み・関係ができてきていることも、ボランティアが長続きする秘訣かもしれません。「最近半分、使命感のような気持ちです。『困っているから助けて!』と言われたら、行くのが当たり前のようになっていますね」と笑うまっつん。頼りになります。



受け手と支え手がペアで子どもたちの声を受け止めます

子どもの声を電話でキャッチするために常に感性を磨いておくための定期的な勉強会。2ヶ月に1回程度実施している。